



第10回

長島城（長島一向一揆）

（三重県桑名市長島町西外面 2175 番地）

鳥越一向一揆歴史館友の会／北陸城郭プロジェクト 塩谷忠士

友の会の世話人をしております塩谷です。今回は桑名市の長島城を紹介します。長島は木曾川・長良川・揖斐川の木曾三川が伊勢湾に流れ込むデルタ地帯にできた砂州の島々で、島の間を分流が網状に流れて防御に適した要害の地でした。長島は伊勢国に属し南北朝時代に伊勢国司となった北畠氏の勢力圏でしたが、戦国時代になると伊勢北部は北勢四十八家と呼ばれる小規模な国人領主が連携して統治される地域となり、文明14年（1482）伊藤重晴が長島城を築いて支配しました。長島杉江に本願寺八世蓮如の六男蓮淳により創建された願證寺は、二世実恵が亡くなった天文5年（1536）の翌年までには長島城に近い南郷西外面付近に移転し、三世証恵の代に伊藤氏を追い出して戦国大名の権力が及ばない事実上の治外法権を有するようになりました。さらに長島のまわりに中江砦（桑名）や大鳥居砦（多度）など多くの端城を築いて守りを固めました。



長島中部小学校を残る大松

元亀元年（1570）8月、本願寺十一世顕如は敵対する織田信長に対抗するように諸国の本願寺門徒に檄を飛ばし、願證寺四世証意も長島で蜂起しました。同年11月ついに長島一向一揆と織田信長の戦いが始まります。本山から派遣された下間頼旦らが指揮する一揆勢は小木江城を攻めて信長の弟信興を自害させました。翌年5月信長自ら5万の大軍を率いて攻め入りますが一揆勢の伏兵作戦に苦しめられ、退却時に殿をつとめた氏家卜全が討死しました（第1次長島攻め）。天正元年（1573）9月、信長は願證寺を支える桑名、員弁地域の門徒や国人を平定して長島に侵攻する戦略へと変更して長島に近づきますが、京都から追放した足利義昭が畿内で蜂起する動きがあり長島城を攻めることなく撤退しました（第2次長島攻め）。翌年7月信長は7万の大軍を率いて長島を陸海四方から攻めて包囲し、一揆勢を長島城と屋長島・中江・篠橋・大鳥居の4つの端城に追い込んだうえで兵糧攻めをしかけ、3カ月に渡る籠城戦の末に長島城は落城、長島一向一揆は壊滅しました（第3次長島攻め）。

長島城最後の城主は元禄15年（1702）に四代将軍家綱の生母の弟増山正利の子正弥が常陸下館から2万石で移封した増山氏で、正同まで八代続きました。城跡は現在長島中部小学校・長島中学校の敷地となり戦国時代の面影はなく江戸時代の遺構でさえ大半が失われています。小学校校庭に残る大松は本丸の西南隅にあったと伝わる樹齢300年のクロマツですが、授業のある平日では遠目に見るのがやっとでした。学校の東側を流れる長島川は長島城の堀跡で大手橋辺りに石垣が残り、近くの蓮生寺に

長島城大手門が山門として移築され、今も増山氏家紋の瓦を見ることができます。



参考資料
信長と長島一向一揆
（輪中の郷）ほか

長島城の堀跡・石垣（長島川大手橋辺り）



蓮生寺山門として移築されている長島城大手門